

びんの中の世界

小川未明

青空文庫

まさぼう
 正坊のおじいさんは、有名な船乗りでした。年をとって、
 もはや、航海をすることができなくなつてからは、家にいて、
 ぼんやりと若い時分のことなどをおもい出して、暮らしていられ
 ました。

おじいさんは、しまいには、もうろくをされたようです。すく
 なくも、みんなには、そう思われたのでした。なぜなら、海の中
 から拾つてきたような、朽ちかかった一枚の黒い板をたいせつに
 して、いつまでもそれを大事にして持つていられたからです。

また、おじいさんは、家の前に立つて、あちらの山のいただき
 をながめながら、

「まだ、こないかいな。」といわれました。

みんなは、それを不思議ふしぎに思おもったのです。

「おじいさん、だれがくるのですか？」と、家うちの人ひとが聞ききますと、

「海うみから、私わたしを迎むかえにこないければならぬはずじゃ。」と、おじい

さんは、答こたえられました。

おじいさんが、とうとう亡なくなられてしまつてから、おばあさ

んは、正坊まさぼうに、よくおじいさんはなしの話はなしをして聞きかせました。

「おまえのおじいさんは、有ゆう名めいな船ふな乗のりりだった。しかし、年としを

取とられてから、もうろくをなさつて、毎まい日にち、あちらの山やまの方ほうを

見みて、海うみから、だれか呼よびにくるはずじゃといつていられた……

。」

まさほう 正坊は、おじいさんの話を聞きたびに、なんとなく不思議な感じかんがしたのです。そして、そのことを、まったくもうろくからの言葉ことばばかりでないというような気がしたのでした。

それで、まさほう 正坊は、やはり、家の前うちまへに立たつて、あちらの山やまをながめていました。青あおい空そらの下したに山やまの線せんが、すその方ほうへなだらかに流ながれている。夜よるになると、山やまの上うへには、さびしく星ほしが輝かがいたのである。春はるから、夏なつにかけて、その山やまは紫むらさきに見みえました。そして、冬ふゆになると、山やまは真まつ白しろになりました。

「雪ゆきが、あのように積つもつては、どんな男おとこも山やまを越こしてくることはできぬだろう。……しかし、その勇士ゆうしは、また非ひ凡ほんな術じゆつで、雪ゆきの上うへを渡わたつてこないともかぎらない。」と、冬ふゆの晩ばん方がたなど、正ま

さほう
坊は、外そとに立たつてながめていたこともありました。

おばあさんは、古ふるくから家うちにあるのだといつて、あめ色いろのガラ
スびんを大事だいじにして、たなの上うえに飾かざつておかれました。雪ゆきの降ふ
ころ、南なん天てんの実みが赤あかくなると、おばあさんは切きつてきて、その
びんにさして仏ほとけさまにあげました。また、春はるになると、つばきの
枝えだなどを折おつてきて、びんにさして、やはり仏ぶつ壇だんの前まえに供そなえら
れたのです。

まさほう
正坊は、なんとなく、そのびんがほしくてなりませんでした。
「おばあさん、あのびんを僕ぼくにおくれよ。」とねだった。

おばあさんは、なかなか正坊まさほうのいうことを聞きかれなかった。
「あのびんは、昔むかしから家うちにあるびんだから、おもちゃにして壊こわす

といけない。」といわれた。

そう聞くと、正坊は、ますますそのびんが欲しくなりました。

昔、酒かなにかはいつて、

渡つてきたらしくもあれば、また、

おじいさんが、船乗りをしていなさる時分、どこかで手にいれた

ものらしくも思われました。

ある日、正坊は、こつそりと、おばあさんに気づかれぬよう

に、たなの上からびんを取り下ろして、外へ持つて出ました。そ

して、びんの口に目を当て、太陽の方に向かつて仰ぎました。

すると、一人の男が、馬にまたがって、遠い地平線から駈けて

くるのが見えます。正坊は、あわてて目を放して、向こうを見

ると、どこにもそんな影らしいものはなかった。正坊は、この

とき、そのびんを魔法のびんだと知ったのでした。そして、このことをおばあさんに話すと、

「ばか、なにをいう。」といつて、おばあさんは取り上げられませんでした。

正坊は、亡くなられたおじいさんが、待っていていられた使いと
いうのは、このびんの中に見える馬に乗った男のことでないかと
考えました。もうろくされたおじいさんは、このびんの中に見え
る男が、いつか、あの山を越えてくるのだと思われたのであろう、
と考えました。

しかし、不思議なことは、二度めに、正坊がびんの口に目を
つけて、空を見たときには、馬に乗った男の影が見えずに、赤い

花はなの咲さいた野原のほらに、はるかに、町まちの姿すがたがちい小さくなつて見みえたこと
です。

三度どめに、彼かれが、そのびんからのぞいて、かなたを見みたときに
は、前まえに見みたような景色けしきは見みえなくて、茫々ぼうぼうとした海原うなばらの中なか
を、ただ一いちそうの船ふねがゆく影かげが見みえたのでした。そして、この三
つぼめんの場面ばめんが、びんの口くちをのぞくたびに、そのときどきに入れい変かわ
つて見みえるだけであつて、他たの景色けしきは見みえなかつたのであります。
ある日ひのこと、

「そう、そのびんを外そとへ持もつて出でて、いつか壊こわすといけなひ。」
と、おばあさんがいわれたのを、正坊まさぼうは、わざと聞きかぬふうを
して外そとへ持もつて出でました。

彼は、^{かれ}往來の上^{おうらい うえ}に立^たつて、それをのぞきながら、友^{とも}だちがや
 つてきたら友^{とも}だちにもものぞかせて自慢^{じまん}をしてやろうと思^{おも}つていま
 した。

このときどこからか、一人^{ひとり}の男^{おとこ}が、ほんとうに馬^{うま}に乗^のつてやっ
 てきました。そして正坊^{まさぼう}を見ると、ふいに、馬^{うま}を止^とめました。

「ちよつとそのびんをお見^みせ。」といつて、男^{おとこ}はびんを取り上^あげ
 て、口^{くち}に目^めを当^あててのぞきました。

「まことに珍^{めづら}しいびんだ。私^{わたし}は、このびんを探^{さが}していたのだ。坊^{ぼう}
 は、私^{わたし}といっしょにこないか？」と、馬^{うま}に乗^のっている男^{おとこ}はいいま
 した。

正坊^{まさぼう}は、かねて、おばあさんから、おじいさんの話^{はなし}を聞^きいて

いました。「おじいさんは、山やまを越こして、だれか、きつと迎むかえにくるといつて待まっていられたそうだ。それは、けつして、もうろくなされたから、そんなことをおつしやられたのでなからう。そおとこの男おとこというのは、きつと、この人ひとにちがいない……。」と、正まさほ坊ぼは心こころの中なかで思おもいました。

「おじいさんは、どこからこられたのですか？」と、正まさほ坊ぼは、たずねました。

「海うみからきた。」と、馬うまに乗のっている人ひとは答こたえた。

それで、正まさほ坊ぼは、まさしくこの人ひとだと思おもいましたから、その男おとこのすすめるままに、いつてみようそくざと、即座そくざに決けつ心しんしました。

男おとこは、自じ分ぶんの脇わきに正まさほ坊ぼを乗のせて、馬うまにむちを当あてました。そ

の馬の脚は速かつたのです。森や、川や、丘を過ぎてゆくと、いろいろの美しい花の咲いた野原に出ました。はるか、あちらを見ると、町の屋根が地平線に浮き上がって見えたのです。

「あ、いつかびんの口から、のぞいて見た景色だ！」と、正坊は、思いました。

「おじさん、どこへゆくのだ……。」と、正坊はたずねた。

「あの町へゆくのだ。」と、男は、答えました。

やがて町へはいろいろとすると、建物の間から、青黒い海が見えました。

町へはいつて、しばらく走ると、馬は、ひさしの深く差し出た、昔ふうの家の前へきて止まりました。男は馬から降りて、内へ向

かつて声をかけました。すると脊の低い老人が、腰を曲げて出てきました。

「お父さん、ようやく、あなたが、もう一度見たいとおっしゃられたびんを持つてきました。これでございましょう……。―」

老人は、齒の抜けた口をもぐもぐさしていましたが、細い、しわだらけの手を出して、びんを受け取りました。そして、びんのまわりをなでまわしていましたが、その口に目をあてて正坊がするように、太陽に向かつて仰いだのです。

「あ、これ、これ、これにちがいない！」と、老人はうれしそうにわめきました。

「私は、やっと、このびんにめぐりあった。もはや、一生のうち

に、めぐりあわなないかと思つていた。しかし、おまえのおじいさんは、死しになされたとみえる……。」

老人ろうじんは、びんを持つて、暗くらい家の内うちへはいりました。しばらくたつと老人ろうじんは、びんの中なかへ、ほんとうにわずかばかりの油あぶらをいれて二人ふたりの前まえへあらわれました。

「永年ながねんしまつておいた油あぶらは、もうこればかりになつてしまつた。もうすこし長ながく月日つきひがたつたら、油あぶらは、一滴てきもなくなつてしまつただらう……。」

私わたしが、海うみの上うへで生活せいかつをしていた時分じぶん、兄きょうだい弟ていの約束やくそくをした仲間なかまがあつた。二人ふたりは、たがいに助けたすつ、助けられつした。そして、別わかれる時分じぶんに、二人ふたりは、もう一度どたずね合あつてあいたいと

いうまじないから、インドの魔法使いからもらったびんと中身なかみの油あぶらとを別々べつべつに持つて帰かえった。こうすれば、いつか、びんと油あぶらは、かならずめぐりあうといった魔法使いの言葉ことばを信しんじたのだ。子供こども！ おまえのおじいさんは、黒い板くろいたを持つていなされたろう……。この油あぶらをともして、その板いたを見るがよい……。」といつて、油あぶらのはいったびんを正坊まさぼうに渡わたしたのでした。

正坊まさぼうは、この町まちと、このおじいさんと、この家うちをよくおぼえておこうと熱心ねっしんにながめていました。

男おとこは、ふたたび、正坊まさぼうを馬うまに乗せてくれました。そして自分じぶんも乗り、馬うまにむちを当あてると、馬うまはきた時分じぶんの道みちを走り出だしました。日は、いつしか海うみに沈しずんで、野原のほらに咲さいている赤あかい花はなも黒くろず

んで見えたのであります。そして、月が大空に上がり、その下を流れている川の水が、一筋の銀の棒を置いたように、白く光つて見えたのでした。

二人を乗せた馬は、村の往来までくると止まりました。そこからは、もう、正坊のお家がじきだったのです。

「さあ、もうここからなら、ひとりで帰れるだろう。」といつて、男は、正坊を馬の脊から下ろしてくれました。

「おじさん、あの町は、なんというの？」と、正坊は、振り返って問いました。

「……………」と、男は、いい残して、馬にむちをあてて去りました。

まさぼう おとこ
 正坊は、男のいった言葉が、よく、はつきりと耳にはいらな
 かった。そのうちに、ひづめの音は遠ざかり、影は、月の明かり
 に、だんだん小さくかすんだのです。
 おばあさんは、門から出たり、入ったりして、正坊を探して
 いられた。そこへ、正坊は帰って、その日のできごとの話をす
 ると、おばあさんは、頭を振って、

「ばか、なにをいう。きつと、おまえは、きつねにでもばかされ
 たのだらう……。」「といわれました。

まさぼう まち な き
 正坊は、町の名を聞きもらしたのが残念でした。おそらく
 そのことは、永久に、彼にとって残念であったにちがいな
 い。なぜなら子供の頭で、いつまでも、町をおぼえていることは

ふかのう
不可能であつたから……。

しかし、それが夢ゆめでないことは、びんの中なかに油あぶらがはいつていた
ことでした。すぐに、土器かわらけにうつして、火ひをつけて、正坊まさぼうは、

おばあさんと二人ふたりで、黒い板くろいたを見みました――。

異様いような、帆船はんせんの姿すがたが、ありありと板いたの面おもてに見みえたかと思おもうと、

また、その姿すがたは、煙けむりのごとく、しだいにうすれて消きえてしまった。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集2」丸善

1927（昭和2）年9月20日発行

初出：「赤い鳥」

1927（昭和2）年1月号

※表題は底本では、「びんの中《なか》の世界《せかい》」となっています。

※初出時の表題は「壇の中の世界」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

びんの中の世界

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>